OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	川で起きた悲劇 : マーク・トウェインは蒸気船事故をどう描いたか
Author(s)	里内, 克巳
Citation	言語文化研究. 2020, 46, p. 25-42
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75490
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

川で起きた悲劇

――マーク・トウェインは蒸気船事故をどう描いたか――

里　内　克　巳

Tragedy on the River:
How Did Mark Twain Write a Steamboat Explosion?

SATOUCHI Katsumi

This paper examines chapter 4 of *The Gilded Age* by situating it as Twain's earliest attempt to fictionalize his own experiences on the Mississippi River. This chapter impressively depicts the great loss of life caused by a steamboat explosion. This is based on the real accident in which Twain's brother lost his life. By comparing the story with *Life on the Mississippi*, whose account is almost faithful to the facts, we can understand how Twain dealt with his own trauma in the form of fiction. The steamboat explosion and its aftermath can be viewed as the archetypal image revealing Twain's guilt-ridden conscience, recognizable throughout his writings. This paper also suggests that the disaster depicted here might reflect the tragedy of the Civil War that ended Twain's career on the river and involved him in the unjustifiable Southern cause.

キーワード：トウェイン，ミシシッピ川，『金ぴか時代』

1．初めての〈川の物語〉

Mark Twain こと Samuel Langhorne Clemens の曲折の多い人生において最も重要な時期の一つが，作家になる以前，セントルイス＝ニューオーリンズ間を往復する蒸気船パイロットとしての修練を積んだ1857年から61年までの期間であることに，異論を差し挟む人はほとんどいないだろう[1)]。パイロットになるまでの見習い時代については，1875年に雑誌 *Atlantic Monthly* に連載された自伝的作品「昔日のミシシッピ川」“Old Times on the Mississippi” で詳しく語られている。刻々と変化する川を細部に至るまで記憶する訓練や，川で出会うさまざまなタイプの人間を観

1）サム・クレメンズが Horace Bixby による指導の下に蒸気船パイロットになる修業を始めたのは，1857年４月あたりと推定される。２年半ばかりの見習い期間を終えて1859年９月９日に免状を取得し，それから1861年４月25日に辞するまでの約１年８か月の期間，正規のパイロットとしての仕事に従事した。

察する経験は，ミズーリ州ハンニバルで過ごした少年時代の体験と同様，トウェインが作家として歩み出すうえでの下地を提供することになった。よく知られているように，ミシシッピ川を舞台にした小説の代表作 *Adventures of Huckleberry Finn*（1885年）には，川によく馴染んだトウェインの過去の体験が十二分に生かされている。

ミシシッピ川で修業を積むなかでサム・クレメンズは，個人的な悲劇にも見舞われた。1858年6月，蒸気船パイロットになるべく共に見習いをしていた弟 Henry Clemens が，蒸気船ペンシルベニア号のボイラー爆発による事故で死亡したのだ。この出来事は「昔日のミシシッピ川」連載時には語られず，後年にその連載原稿を組み込んだうえで完成させた『ミシシッピ川の生活』*Life on the Mississippi*（1883年）の第20章「大惨事」“A Catastrophe” において，一般読者に初めて明らかにされた[2)]。作家トウェインがこの過去の辛い体験をほぼ生の形で作品化するのに，四半世紀近くの時間を要したことになる。

しかし一方，ノンフィクションではなく小説という体裁をとった形では，トウェインはもっと早い時期にミシシッピ川での体験を作品化している。Charles Dudley Warner との合作という特異な形をとった1873年の『金ぴか時代』*The Gilded Age* は，旅行記作家だったトウェインが小説家へと転身する時期に書かれた長編小説だが，その第4章に，二隻の蒸気船が猛スピードで競走したあげく大惨事が起きる，というエピソードが出てくる。章の最後にトウェインとウォーナーは原注を入れ，この爆発の出来事は作りごとではなく，ここで語られているようなことが実際に起こったのだと，簡潔に述べている（52）。後年に明かされるトウェインの伝記的事実を知ったうえで読めば，ここでのエピソードが，弟ヘンリーが乗り合わせたペンシルベニア号の悲劇を下敷きにしたものであることは，容易に推測がつく。

それにも拘わらず，蒸気船爆発をめぐる伝記的事実とその作品化の経緯については，不思議なくらいに先行研究が乏しい。そのなかで最重要と思われるものは，研究者 Edgar Marquess Branch が1985年に上梓した小冊子 *Men Call Me Lucky: Mark Twain and the* Pennsylvania である。そこでブランチは，ペンシルベニア号の爆発事故とそれによって起きたヘンリー・クレメンズの死をめぐる事実について，可能な限りの実証的調査を行なった。そして，その悲劇がまず『金ぴか時代』で作品化されてから『ミシシッピ川の生活』で再び取り上げられたことにも触れている。しかし，ブランチの議論の大半は歴史的事実の検証に割かれており，作品分析に関してはごくわずかで表層的なレベルに留まっている。

『金ぴか時代』第4章は，トウェインの小説家への転身期に書かれており，しかも彼がミシシッピ川を素材として利用した実質的に初めてのフィクションである。だが，注目される価値

2）「昔日のミシシッピ川」は，1875年の1月から6月，そして8月の7回にわたって月刊誌『アトランティック・マンスリー』に連載された。8年後，トウェインはこの作品の連載1回分を2つに分け，『ミシシッピ川の生活』の第4章から第17章に組み入れた。その続きとなる第18章から第21章は，『ミシシッピ川の生活』後半における戦後の南部再訪の諸章への橋渡しのために書かれたものである（執筆は1882年の5月から6月にかけて）。『ミシシッピ川の生活』の構想・執筆過程に関する詳細は，Horst H. Kruse の *Mark Twain and* Life on the Mississippi を参照のこと。

があるにも拘わらず，これまでのところ本格的な検討がなされていない。その理由としては，この物語が全62章に及ぶ長編小説のごく一部を構成するにすぎないことや，この長編自体が合作であるという事情でトウェイン研究者が敬遠しがちであることが，ひとまずは考えられる[3)]。しかし，この問題の章というのは，それだけを取り出して短編小説のアンソロジーに組み込もうと思えばできるくらいの独立性を有しているのだし，後に述べるように，この章のテクストには，トウェインがウォーナーの手を借りずに単独で執筆した形跡が明白に残されている。したがって，この物語が注目されない理由は，その背景を成す伝記的事実にまだ十分な注意が向けられていないことにも求められるのではないか。

そこで本稿では，等閑視されてきた『金ぴか時代』の第4章にウェイトを置いて，トウェインによる蒸気船爆発の叙述の重要性を，さまざまな角度から探ってみたい。議論の流れとしては，ペンシルベニア号爆発事故をめぐる事実をほぼ忠実になぞった『ミシシッピ川の生活』第20章を最初に眺め直し，それを踏まえて，より早い段階で書かれたフィクション作品『金ぴか時代』第4章の分析へと移る。時代を隔てたこれら二つのテクストを読む際には，ブランチが明らかにした諸事実と照らし合わせながら，この悲劇がどのように作品化されたのか，そしてそれが作家としてのトウェインにとっていかなる意味を持っていたのかを考える。第4章の分析に際しては，作品全体におけるこの章の役割や，*The Adventures of Tom Sawyer*（1876年）など後続作品との関連性も視野に入れつつ，この章のフィクションとしての処理の仕方を念入りに考察する。本稿の最後においては，トウェインが描いた蒸気船爆発の悲劇が，南北戦争というより大きな悲劇と繋がる可能性も指摘したい。

2．脚色されたノンフィクション

トウェインは，「昔日のミシシッピ川」に引き続いて自身のパイロット見習いの体験を語った『ミシシッピ川の生活』第18～20章において，弟ヘンリーも自分も，同じペンシルベニア号で訓練を受けていたにも拘わらず，ヘンリーだけが死ぬことになった事情を明かしている。本来ならばサム・クレメンズ自身もペンシルベニア号に乗っているはずであった。しかしヘンリーを守るため，意地悪で暴君のように振る舞うパイロットのMr. Brownに口答えし，暴力も振るったために下船を余儀なくされた。第18章 “I Take a Few Extra Lessons” と第19章 “Brown and I Exchange Compliments” では，そこまでの経緯が語られている。弟の乗る蒸気船を追いかけるようにして，サムは別の船で後からニューオーリンズを出港する成り行きになったのだった。

1858年6月13日，テネシー州メンフィスから60マイルばかり南の流域で，ペンシルベニア号

3)『金ぴか時代』各章ごとのトウェインとウォーナーの執筆分担については，B. M. Frenchの著書 *Mark Twain and* The Gilded Age を参照（60–63）。また，永原誠は『マーク・トウェインを読む』の第2章「『金メッキ時代』（1873）――マーク・トウェインと金メッキ時代」（81–108）において，共作という特殊な執筆形態から生じる読みの問題や，トウェインとウォーナーの描写の違いなどを論じている。

は原因不明のボイラー爆発を起こし，火に包まれた船体はほどなくして川底に沈んだ。多くの死傷者を出したこの惨事のことを翌14日に知ったサムは，15日にメンフィスに到着し，他の大勢の負傷者と共に横たえられている瀕死の弟に対面した。手の施しようもなく，ヘンリーは21日にこの世を去った。瀕死の弟の傍にいる最中のサム・クレメンズが，18日に兄Orionの妻Mollyに宛てて書いた手紙の一節を以下に引用しよう。

> Long before this reaches you, my poor Henry, —my darling, my pride, my glory, my *all*, will have finished his blameless career, and the light of my life will have gone out in utter darkness. O, God! this is hard to bear. Hardened, hopeless, —aye, lost–lost–lost and ruined sinner as I am—I, even *I,* have humbled myself to the ground and prayed as never man prayed before, that the great God might let this cup pass from me, —that he would strike me to the earth, but spare my brother—that he would pour out the fulness of his just wrath upon my wicked head, but have mercy, mercy, mercy upon that unoffending boy. The horrors of three days have swept over me—they have blasted my youth and left me an old man before my time. Mollie, there are gray hairs in my head to-night. For forty-eight hours I labored at the bedside of my poor burned and bruised, but uncomplaining brother, and then the star of my hope went out and left me in the gloom of despair. Then poor wretched me, that was once so proud, was humbled to the very dust, —lower than the dust—for the vilest beggar in the streets of Saint Louis could never conceive of a humiliation like mine. Men take me by the hand and *congratulate* me, and call me "**lucky**" because I was not on the Pennsylvania when she blew up! My God forgive them, for they know not what they say.（*Mark Twain's Letters* 80–81　斜体・強調は原文のまま）

当時まだ22歳だったサム・クレメンズは，爆発事故が自分に与えた途方もない衝撃と心の苦しみを，率直にこの手紙のなかで吐露している。神様は本当ならば罪深い僕の方を死なせてしかるべきだったのに，どうして何の悪いこともしていないヘンリーの方を選んだのか。僕もまた同じペンシルベニア号に乗り合わせて死ぬべきだった。それなのに皆は僕の手を握り，乗り合わせていなくてよかったね，と祝福してくる。その言葉がどれほど自分を傷つけるのか，分かっていないのだ。そんな主旨のこの手紙には，大切な弟の死に臨んでの深い悲嘆，自分の方が死ぬべきなのだという自責の念，そして，神の理不尽な計らいに対する怒りにも似た不信感が読み取れる。

ここでサム・クレメンズが感じたこの世の不条理さや神への不信は，この出来事を取り上げた『ミシシッピ川の生活』の第20章「大惨事」においても読み取れる。ボイラーが爆発して船体の大半が吹き飛んだ後，火災が発生した後のことを描いた場面のなかに，次のようなくだりがある —— "By this time the fire was beginning to threaten. Shrieks and groans filled the air. A

great many persons had been scalded, a great many crippled; the explosion had driven an iron crowbar through one man's body—I think they said he was a priest. He did not die at once, and his sufferings were very dreadful" (241)。鉄のバールが体を貫き，苦しんで死んでいく聖職者らしき男性の姿を書き込むことによって，トウェインは，この世の悲惨さ・不条理さに対して神が無関心であること（ないしは無力であること）を，暗に批判している。さり気ない記述であっても，無神論的な世界観を表明する *No.44, The Mysterious Stranger*（1902–08年執筆）など最晩年の作品に繋がる要素を，ここに見出すことができる。

苦しんで死んでいく牧師の描写には，書き手トウェインの考えがおそらく投影されているが，このように「大惨事」の章を読む際には，事実そのままではなくある程度の脚色も混じっている可能性を斟酌しなければならない。その顕著な例が，ボイラーが爆発してからの弟ヘンリーの行動である。実証的な調査が明らかにしたところでは，ヘンリーはボイラー爆発によって上空に投げ上げられた後，川にではなく船体へと落下し，その際の衝撃によって頭部などに回復不能の重傷を負ってしまった（Branch 13)。つまり事故が起こってからのヘンリーは，実際にはそもそも誰かを救助できるような状態ではなかった。

ところが作品において，ボイラー爆発後のヘンリーは勇敢にも救助活動に向かう。そして，その行動には他ならない「私」＝サム・クレメンズが関与している。以下は，ペンシルベニア号出航に先立つ記述からのくだりである。

> The night before the "Pennsylvania" left, Henry and I sat chatting on a freight pile on the levee till midnight. The subject of the chat, mainly, was one which I think we had not exploited before—steamboat disasters. One was then on its way to us, little as we suspected it; the water which was to make the steam which should cause it, was washing past some point fifteen hundred miles up the river while we talked; —but it would arrive at the right time and the right place. We doubted if persons not clothed with authority were of much use in cases of disaster and attendant panic; still, they might be of *some* use; so we decided that if a disaster ever fell within our experience we would at least stick to the boat, and give such minor service as chance might throw in the way. Henry remembered this, afterward, when the disaster came, and acted accordingly.（236　斜体は原文のまま）

この記述によれば，ニューオーリンズから出港する直前，サムとヘンリーの兄弟は話をして，もし万一蒸気船で事故が起こっても，逃げ出さず，船に留まって他人の役に立つように行動しよう，と互いに約束していた。しかしその示し合わせに従って行動した結果，弟は爆発で吹き飛ばされていったん川に落ちながらも，怪我人を助けるため，大破して火災を起こした蒸気船へと泳いで戻って行き，それで命を落としてしまった——そんなストーリーをトウェインは作

り出したのだった（241–43）。ここでのヘンリーは，実際よりも英雄的・自己犠牲的に描かれている。このような改変には，書き手の弟に対する愛情と敬意が表れているが，同時にこれは，弟の死に対して自分にも責任の一端があることをほのめかした物語づくりだとも言える。先に引用した手紙でも示唆されているサミュエル・クレメンズの自責の念が，このような物語づくりに影を落としている。

改変するのではなく削り落としてしまった事実もある。ペンシルベニア号のボイラー爆発の直接的な原因については，結局はっきりしないままで終わるのだが，後述するように，事故の原因究明の過程で複数の可能性が浮上することになった。しかし第20章「大惨事」でのトウェインは，爆発の直接的な原因として取り沙汰された要素についてはまったく書き込んでいない。兄弟のやり取りをめぐる先ほどの引用部を振り返ると，やがて致死的な蒸気へと変わるはずの川の水がゆっくりと近づいてきていた，というくだりが組み込まれているが，こうした近い将来に起こる悲劇を先取りするような文章には，爆発を人為的な原因に帰するより，人知ではコントロールしえない運命のような出来事として提示しようとするトウェインの意図を読むことができる。はたして爆発の瞬間を描く記述は，次のようにごくシンプルなものである── “The wood being nearly all out of the flat now, Ealer rang to “come ahead” full steam, and the next moment four of the eight boilers exploded with a thunderous crash, and the whole forward third of the boat was hoisted toward the sky! The main part of the mass, with the chimneys, dropped upon the boat again, a mountain of riddled and chaotic rubbish—and then, after a while, fire broke out” （238–39）。

以上に示したような幾つかの処理によって，この章では，爆発事故をめぐる事情に外的な原因や責任を求めるよりも，その後に起きたヘンリーの死にほかならぬ「私」自身が関与していたという点に，一番の重きが置かれることになった。「大惨事」でペンシルベニア号の悲劇を描く際，トウェインは大きく事実をはずれることなく冷静な筆致で記述することを心がけている。だから基本的にこの章は，ノンフィクションとして位置付けられる。しかしそれでも，提示する事実を書き手はある程度取捨選択し，部分的に曲げることによって，この悲劇のパーソナルな性質をより強調している。

3．追跡劇の顛末

本節からは執筆年代を遡り，問題の蒸気船事故についてより大きな改変がなされている『金ぴか時代』第４章を検討することにしたい。この章のストーリーはおよそ次のようなものである。ニューオーリンズから出港してミシシッピ川を北上中の蒸気船ボレアス号（“the Boreas”）は，あるパイロットに恨みを抱かれ，その男が操舵するアマランス号（“the Amaranth”）に追いかけられる。ボレアス号は必死で逃げ切ろうとするのだが，アマランス号は執拗に後を追い，

その差が次第に縮まっていく。猛スピードで航行する二隻の船はついに相並び，乗組員たちはお互いにいがみ合う。その最中に突然，アマランス号のボイラーが爆発して船は大破，やがて炎に包まれる。ほどなくしてボレアス号の乗組員たちはアマランス号の乗客・乗組員の救助に乗り出すのだが，その甲斐もなく多くの死傷者が出る。ボレアス号には，小説のメインストーリーで大きな役割を果たすSilas Hawkinsとその家族が乗り合わせていた。この事故で家族を失ってしまったLauraという名の少女をサイラスが引き取り，ホーキンズ家の一員として育てることになる成り行きが，直後の第5章で語られることになる。

前節で検討した「大惨事」での，事実にほぼ即した記述とは異なり，『金ぴか時代』第4章の場合は，二隻の船の競走という趣向が物語の目玉となり，それが爆発の直接的な原因となっているのがまず注意を引く。本節ではこの趣向に焦点を当てることにする。ブランチの調査によれば，ペンシルベニア号が事故の直前に他の複数の船舶と競争をしたという事実があり（44–46），ボイラー爆発もそれが引き金になって起きた可能性は排除できない。トウェインはそうした事情を念頭に，ドラマチックな蒸気船の追跡劇を前面に立てたのかもしれない。

しかし同時に，ペンシルベニア号絡みの事実だけが材源であるとは考えにくい。というのも，『金ぴか時代』の2年後に書かれた「昔日のミシシッピ川」を参照するならば，見習いの「私」を指導するパイロットのHorace Bixbyが見事な操舵技術を披露する “A Daring Deed”（『ミシシッピ川の生活』では第7章）や，当時盛んであった蒸気船レースを主たる話題として取り上げた “Racing Days”（同書第16章）などに，『金ぴか時代』第4章との対応関係を見出すことができるのだから。特に前者で，ミシシッピ川のなかでもとびきりの難所になっているHat Island付近をビクスビーが見事に通過してみせる息詰まる場面は，『金ぴか時代』でのボレアス号のパイロット（George Davis）が，川の難所を渡ることでアマランス号の追跡をかわそうとする場面と，きわめてよく似ている。興味深いことに双方の場面においては，書き手自身の筆名ともなっている「水深二尋」（mark twain）という言葉が現れ，しかもどちらも “M-a-r-k twain!” という同じ視覚的強調が施されている，という共通点もある（*Life* 96–97; *Gilded Age* 47–48）。こうした「昔日のミシシッピ川」での記述との強い結びつきを考慮するならば，『金ぴか時代』第4章での蒸気船どうしの競走を，ペンシルベニア号の爆発に至る経緯を踏まえたものと見るだけでは不十分だろう。この章を書く際にトウェインは，自身の元蒸気船パイロットとしての幅広い経験・知識・見聞を存分に利用することで，ペンシルベニア号の悲劇を巧みにフィクションへと変換し膨らませていると考えられる。

二隻の船の追跡劇というこの趣向は，それを『金ぴか時代』という作品全体の文脈に置いて理解することもできる。船どうしの競走というシチュエーションは，トウェインとウォーナーという二人の作家が共同で一つの小説『金ぴか時代』を書くという制作過程を想起させ，一種の自己言及性を帯びている。また，ここでの追跡劇は，美しく成長したローラ・ホーキンズが，かつて自分を弄んで捨てた南部人George Selby大佐を追い詰め射殺する（第46章）に至る小説

後半部の展開を予示している，という別の見方も可能だろう。興味深いことに，ボレアス号とアマランス号が航行する川の難所は，奇しくも “Murderer’s Chute” と呼ばれており（46），ここでの “chute”（急流）は，銃を発砲するという意の “shoot” と同じ発音である。

それに加えて，第 4 章の締めくくりとなる以下の文章が，『金ぴか時代』の以降の展開を予示するものになっていることにも留意する必要がある── “A jury of inquest was impaneled, and after due deliberation and inquiry they returned the inevitable American verdict which has been so familiar to our ears all the days of our lives ──“NOBODY TO BLAME”” (52)。ここでは，爆発によって引き起こされた悲劇の法的責任が検証されるが，そこで陪審員たちは「誰にも責任はない」という結論を出す。この陪審の判断は，小説終盤で殺人を犯したローラに下される陪審団の結論 “Not GUILTY”（522）と響き合う。ローラの弁護人となった Mr. Braham はやり手の弁護士で，結果的に彼女の無罪を勝ち取ることができた。だがその彼の弁舌には，終始過剰で皮相的な要素がつきまとっている。ブラハムは，殺害されたセルビー大佐を，ローラを弄んで捨てた悪漢として描き出し，逆に被告であるローラについては，その孤児としての哀れな生い立ちをことさらに強調して陪審員たちの心証を得ようとする。ブラハムの芝居がかった弁舌と，それに乗せられて情緒に流れてしまう陪審団の素人ぶりを通して浮上するアメリカの裁判制度の程度の低さが，『金ぴか時代』終盤においての風刺のターゲットになっていると見て間違いない[4)]。その前触れとなるのが，第 4 章の結末部である。白黒の決着をつけられずに終わった蒸気船事故の裁定を揶揄するように，語り手は “inevitable American verdict” という皮肉な表現を与えているが，そこでのアイロニーは，ローラを無罪放免にして終わる小説の山場に通じていく。

ミシシッピ川が物語のなかでほとんど現れない『金ぴか時代』という長い作品のなかで，問題の第 4 章だけは，川という舞台を生かした迫真的なストーリーが展開し，きわめて異質で例外的な章になっている。この章だけを取り出して，独立した一編の作品として読むことも可能だろう。しかし以上のように考察してみると，この章は小説全体の流れからいたずらに遊離しているのではなく，逆に全体のなかに有機的に組み込まれ，その雛型として機能する側面もある。そう考えれば二隻の船の競走というこの章の趣向は，『金ぴか時代』の物語の流れを十分に考慮したうえでの巧みなフィクション化であると言える。

4．幽閉と火災

前節では『金ぴか時代』第 4 章に顕著に表れ，後年のノンフィクション「大惨事」にはない

4）B. M. French も *Mark Twain and* The Gilded Age において，ローラ・ホーキンズを軸としたストーリーの山場となる裁判場面での書き手の狙いは，アメリカの陪審員制度の欠陥を暴くことである，と主張している（107）。French はまた，同様の陪審制への不信は，*Roughing It*（1872 年）など『金ぴか時代』に先立つトウェインの作品群にも見出せると指摘する（102）。後続のトウェイン作品との関連について付け加えると，雄弁でありながら底の浅い弁舌を振るう『金ぴか時代』のブラハム氏は，晩年の小説 *Pudd’nhead Wilson*（1894 年）における弁護士兼探偵の David Wilson の前身にあたる人物だと言える。

独自の設定に焦点を当てたが，本節では逆に，両者に共通して描かれた，一見すると周縁的な場面に光を当て，そこに込められた意味を考えてみたい。それらの場面はいずれも，蒸気船のボイラーが爆発してから後の記述に現れる。まず二つの作品から該当する箇所を引用して並べてみる。最初の引用は『金ぴか時代』からのもので，続く引用は，『ミシシッピ川の生活』の「大惨事」の章から取ったものである。

> And now a new horror presented itself. The wreck took fire from the dismantled furnaces! Never did men work with a heartier will than did those stalwart braves with the axes. But it was of no use. The fire ate its way steadily, despising the bucket brigade that fought it. It scorched the clothes, it singed the hair of the axemen—it drove them back, foot by foot—inch by inch—they wavered, struck a final blow in the teeth of the enemy, and surrendered. And as they fell back they heard prisoned voices saying:
>
> "Don't leave us! Don't desert us! Don't, don't do it!"
>
> And one poor fellow said:
>
> "I am Henry Worley, striker of the Amaranth! My mother lives in St. Louis. Tell her a lie for a poor devil's sake, please. Say I was killed in an instant and never knew what hurt me—though God knows I've neither scratch nor bruise this moment! It's hard to burn up in a coop like this with the whole wide world so near. Good-bye boys—we've all got to come to it at last, anyway!" （50　下線は引用者による）

> By this time the fire was making fierce headway, and several persons who were imprisoned under the ruins were begging piteously for help. All efforts to conquer the fire proved fruitless; so the buckets were presently thrown aside and the officers fell-to with axes and tried to cut the prisoners out. A striker was one of the captives; he said he was not injured, but could not free himself; and when he saw that the fire was likely to drive away the workers, he begged that some one would shoot him, and thus save him from the more dreadful death. The fire did drive the axemen away, and they had to listen, helpless, to this poor fellow's supplications till the flames ended his miseries.（241　下線は引用者による）

どちらの記述も，船内の閉じ込められた空間で人々が迫りくる火災に直面し，逃げられずに苦しみながら死んでいく光景である。いずれの描写も下線で示したように，若い下働きの船員（striker）に囚人（prisoner）ないしは捕囚（captive）としてのイメージを与えており，突き合わせると，トウェインが二作品でほぼ同一の場面を繰り返し描いていることが了解される。しかし，この類似に注目すると，別の疑問が生まれてくる。密閉された空間で人がじわじわと焼か

れていく，という残酷な成り行きは，ヘンリー・クレメンズに降りかかった運命とは異なっている。大破したペンシルベニア号でこのような出来事が起きたのをトウェインが伝え聞き，それを下敷きにした可能性は残るとしても，書き手がこの描写に並々ならないこだわりを見せているようであるのはなぜなのか。このことを考えるためには，『金ぴか時代』からいったん離れ，その後に書かれたトウェイン作品を参照する必要がある。

『ミシシッピ川の生活』をひもとくと，この問題の場面とヘンリーとの関連性が見えてくる。この著作の終盤にあたる第56章「法律上の疑問」“A Question of Law”は，サム・クレメンズが少年時代に家族と暮らしていたハンニバルで1853年に経験した，ある事件の回想に充てられている[5)]。サムはある飲んだくれの浮浪者が皆からからかわれているのを不憫に思い，彼が煙草を喫うためのマッチをこっそりプレゼントしてあげた。ところがすぐ後に，この浮浪者は町の留置場に入れられ，そこでマッチを注意して扱わなかったため夜に火災が起きる。その結果，男は留置場に閉じ込められたまま焼死してしまう。

> Behind the iron bars, and tugging frantically at them, and screaming for help, stood the tramp; he seemed like a black object set against a sun, so white and intense was the light at his back. That marshal could not be found, and he had the only key. A battering-ram was quickly improvised, and the thunder of blows upon the door had so encouraging a sound that the spectators broke into wild cheering, and believed the merciful battle won. But it was not so. The timbers were too strong; they did not yield. It was said that the man’s death-grip still held fast to the bars after he was dead; and that in this position the fires wrapped him about and consumed him. As to this, I don’t know. What was seen after I recognized the face that was pleading through the bars was seen by others, not by me.（549）

大声で叫びながら鉄格子を握りしめ，なすすべもなく炎に包まれていく男の姿を，駆けつけたサム少年は目にしながらも，惨さのあまり最後まで正視できなかった。その迫真的な描写は，例の船上での火災の場面にとてもよく似ている。浮浪者が焼け死んだのは自分のせいだ，自分が殺したようなものだ──そう考えたサムは，誰にも言えないまま良心の呵責に苦しめられていく。そして，自分に罪はあるのかどうか思い悩んだ末，彼は自分が当事者であることを隠したうえで弟のヘンリーに状況説明をしてお伺いをたてる。マッチを差し出した者に確かに罪はあるよ──ヘンリーはそんな判断を下して彼を震え上がらせるが，嫌疑が自分に及ばなかったためにひとまずは安堵する。「法律上の疑問」の章ではそのような顛末が語られている。

5）Dixon Wecter は *Sam Clemens of Hannibal* のなかで，サム・クレメンズの兄オーリオンが書いた手記を引用し，1853年にハンニバルの留置場で悲惨な焼死を遂げた浮浪者は，Dennis McDermid というアイルランド人だったと紹介している（254–55）。マクダーミッドについては，Gary Scharnhorst による最新のトウェイン評伝の記述なども参照のこと（63–65）。

少年期のサム・クレメンズに暗い影を落としたこの出来事は，最晩年の1900年に彼が『自伝』のために書いた文章のなかでも顔を見せるが（*Autobiography* 158–59），この章と最も密接な繋がりを持つトウェインのフィクション作品は，1876年の『トム・ソーヤーの冒険』である[6]。この有名な作品には，無実の罪をかぶって刑務所に入れられたMuff Potterを，その責任の一端を担うトムがハックと一緒にお見舞いに行く場面がある（第23章）。後ろめたい思いを抱えたトムは鉄格子越しに煙草とマッチを差し入れてあげるが，マフ・ポッターから熱烈な感謝の言葉をかけられることで，更に激しく良心の呵責に責め立てられる（183–84）。

この小説でトムの内面を探り監視する役割を与えられているのは，弟のSid Sawyerだ[7]。例えばこの小説の第11章で，悪夢に苛まれるトムは，寝ている間に秘密を漏らしかねないうわごとを聴かれないよう，顎に包帯を巻いて寝る。だがシッドは，夜中にこっそりとその包帯を解いて兄の口から出てくる言葉に耳を澄ませる（105）。「法律上の疑問」の章においても，悪夢にうなされたサム・クレメンズ少年がうわごとを口走り，隣で寝ていて安眠を妨げられた弟のヘンリーから文句を言われて大いに慌てる，という類似したくだりが出てくる（*Life* 550）。トム・ソーヤーはサム・クレメンズを，そしてシッドはヘンリーをそれぞれモデルにしていることは，よく知られている。したがって，『ミシシッピ川の生活』の第56章で，サム少年が差し出したマッチのために焼死する浮浪者のエピソードは，『トム・ソーヤー』で主人公の，ひいては書き手トウェインの抱えた罪悪感と繋がるこうした場面と明らかな照応関係にある。

ここで『金ぴか時代』第4章に議論を戻すと，大破した蒸気船のなかに人々が閉じ込められて焼死するという先述の惨たらしい場面もまた，上に指摘した『ミシシッピ川の生活』第56章や『トム・ソーヤーの冒険』などと密接に繋がっていると推定され，しかも時期としてはいちばん早くに書かれている。その意味でこの場面は，さまざまな種類の罪悪感に満ちたトウェイン文学の原風景と言ってもよい[8]。

第4章で書き手トウェインの罪悪感を読み込みうる箇所は，それだけではない。以下の引用は，アマランス号の船上で起きた悲惨な出来事を物語るエピソード群の締めくくりとなるものである。

> The head engineer of the Amaranth, a grand specimen of physical manhood, struggled to his feet a ghastly spectacle and strode toward his brother, the second engineer, who was unhurt.

6）この点については，主人公トムと敵役Injun Joeとの一体性という観点から作家トウェインが抱えた罪悪感の表出を探った拙論「改訂される事実とフィクション――マーク・トウェインの未発表小説『それはどっちだったか』の来歴を探る」を参照。

7）この点については竹内康浩が，その著書『謎解き『ハックルベリー・フィンの冒険』――ある未解決殺人事件の深層』のなかで触れている（152–53）。

8）ディクソン・ウェクターは，ここでの惨事でサム・クレメンズ少年が経験した死への恐怖が，1858年に起きたペンシルベニア号での悲劇によって再度強められたのではないか，という示唆を行なっている（56）。ウェクターの指摘は本稿で扱った『ミシシッピ川の生活』での記述にまで及ぶが，『金ぴか時代』の蒸気船爆発をめぐるエピソードへの言及はない。

He said:

"You were on watch. You were boss. You would not listen to me when I begged you to reduce your steam. Take that!—take it to my wife and tell her it comes from me by the hand of my murderer! Take it—and take my curse with it to blister your heart a hundred years—and may you live so long!"

And he tore a ring from his finger, stripping flesh and skin with it, threw it down and fell dead! (52)

これは，重傷を負ってボレアス号に担ぎこまれたアマランス号の第一機関士が，その兄弟である無傷の第二機関士に対して，息も絶え絶えに話しかける場面である。お前が俺の言うことを聞かずに蒸気圧をどんどん高めていったからこんな惨事になったのだ，と彼は言う。それから彼は自分の指輪をやっとの思いで抜き取り，これを俺の妻に渡すんだ，そして罪悪感に死ぬまで苦しめられるがいい，と呪いの言葉を吐きかける。

ブランチによる調査を参照すると，ペンシルベニア号のボイラー爆発の原因を究明する調査の過程で，職務怠慢の疑惑が浮上した。Francis Dorrisという名の機関士が担当時間に持ち場を離れていたために事故が起きたのだ，という噂が広がったのである。そしてその兄弟の機関士James Dorrisが重傷を負い，フランシスを責めながら死んでいったという証言もある（44)。事故直後に取り沙汰された，真偽が必ずしも判然としないこうした噂を念頭に，トウェインはこの場面を書いたのかもしれない。だが，たとえそうであったとしても，彼にとってこの兄弟どうしの諍いは，閉じ込められたまま焼死する船員のエピソードと同様に，フィクションという次元で再現するならば，弟ヘンリーの死に対する自身の罪悪感をひそかに表出させるのに，うってつけの素材だったはずである。

『金ぴか時代』を書いた時期のトウェインは，ヘンリーの死をめぐる自身のトラウマにまだしっかりと向き合うことができず，それを避ける形でのフィクション化を行なった──そのようにブランチは指摘している（79)。しかし私の見解は少々異なる。すなわち，『金ぴか時代』においてもトウェインは，後年の「大惨事」の章とほぼ同じ程度に，あるいはそれ以上に，自らが受けた精神的トラウマを文学作品として確固とした形にしている。むしろ事実に縛られざるを得ない私語りのノンフィクションより，より自由度の高いフィクション作品においてこそ，トウェインは自責の念を込めつつ弟の死を悔やむ気持ちをより多く盛り込めたのではないだろうか。

5．〈戦争〉としての蒸気船爆発

サミュエル・クレメンズの弟ヘンリーは，作家トウェインの初期から盛期にかけての作品を

読むうえでの鍵となる人物の一人である。『金ぴか時代』『トム・ソーヤーの冒険』『ミシシッピ川の生活』といった一連の作品の検討から，すでに死者となっていた弟ヘンリーが，自分にとっての〈良心〉ないしは〈もう一人の自分〉として，書き手サム・クレメンズのなかに内面化されていたことを私たちは推し量ることができた。ただしそこから考えを一歩進めて，書き手がそもそも何に罪悪感を抱いているのか，という対象をより明確にしようとすると難所に突き当たる。たとえば『金ぴか時代』第4章で描かれた蒸気船の爆発エピソードには，ヘンリーの死をめぐるトウェインの罪悪意識を読み込むことが確かにできるものの，彼が後ろめたく感じているのは，はたしてそれだけなのか。それに先立ってハンニバルの留置場で起きた火災についてはどうか。しばしば指摘されるような，サムが11歳の時に死んだ父John Marshall Clemensをめぐる心的トラウマが関わっているのか[9]。そのように詰めて考えていくと，書き手が抱えた罪悪感の由来を単一の対象に絞り切るのはかえって無理があるように思われる。

この節では，トウェインが提示する蒸気船事故はヘンリーの死という私的な悲劇を描きだすだけでなく，南北戦争という国家的な悲劇も反映しているのではないか，という別の可能性を探ってみたい。サム・クレメンズ自身はこの戦争において正規の兵士にはならなかった。彼は戦争勃発から間もない1861年6月にミズーリ州ハンニバルに戻り，南軍に肩入れする若い有志から成る民兵組織に入って活動し，数週間で離脱した。その経緯は，エッセイ “The Private History of a Campaign That Failed”（1885年）で自嘲気味に明かされている。そこに盛られた戦争への嫌悪や恐怖，そして南部に対する心情の揺れが，長編小説 *A Connecticut Yankee in King Arthur’s Court*（1889年）終盤での，評価の別れる大殺戮へと繋がっていく，と主張する研究者は多い[10]。

トウェインが文学者として名を成した戦後の時期には，ミシシッピ川は南北戦争の記憶と強く結びつくトポスとなっていた。『ミシシッピ川の生活』での南部再訪の諸章でも，ミシシッピ川上で戦われた〈ベルモントの戦い〉を目撃した蒸気船パイロットの体験譚が第26章で挿入されていたり（281–84），ミシシッピ川を臨む都市ヴィックスバーグでの戦時の窮乏生活が第35章で活写されていたりする（375–86）。これに照らせば，トウェインの蒸気船事故の表象に関して次のような解釈が可能であるかもしれない。すなわち彼は，表面上は南北戦争以前の出来事としてペンシルベニア号の爆発とその余波を描いているのだが，時間を前倒しするように，アメリカという国家を二分した戦争の惨禍のイメージもひそかに重ねているのではないか。この点

9）トウェインがしたためていたノートブックの1903年10月10日付の項目には，John Marshall Clemensが1847年にこの世を去った際，検死解剖の現場をひそかに鍵穴から目撃したことを匂わす記述がある（Scharnhorst 34）。父の死を重視して作家トウェインの人生と作品を再考する研究は，後藤和彦 『迷走の果てのトム・ソーヤー』や竹内康浩の前掲書などがある。

10）代表的な論として，Daniel Aaronの著書 *The Unwritten War: American Writers and the Civil War* におけるトウェインの章（133–45）を参照。井川眞砂による「『コネティカット・ヤンキー』とトウェインの「革命願望」」も同様の角度からの論考であるが，ここで井川は，エッセイ「従軍失敗談」で徹底できなかった自身の過去の見直し作業をトウェインは『コネティカット・ヤンキー』で継続し，「現実には忌避した南北戦争を作中で戦ったのではないか」（233）と主張している。

を検分するべく，『金ぴか時代』における蒸気船爆発の描かれ方に再度立ち戻ってみることにしよう。

まず第4章のテクストを再び読み直してみるならば，ここには戦争を想起させるイメージが幾つか散りばめられていることに気づかされる。まず，この章の冒頭近く，蒸気船どうしの競走が起こる前のミシシッピ川の様子は，次のように描写されている ── “When the sun went down it turned all the broad river to a national banner laid in gleaming bars of gold and purple and crimson; and in time these glories faded out in the twilight and left the fairy archipelagoes reflecting their fringing foliage in the steely mirror of the stream”（42 下線は引用者による）。この引用において，日が落ちる前の川の表面は，興味深いことにアメリカ国旗の相貌を見せている。また，ボレアス号とアマランス号が相並んで双方の乗員がお互いに罵り合う騒ぎが始まってほどなくアマランス号のボイラー爆発が起こるが，その瞬間を描写したくだりは，“And then there was a booming roar, a thundering crash, and the riddled Amaranth dropped loose from her hold and drifted helplessly away!”（49）と書かれている。ここで使われている “riddled” という語は，銃弾や砲弾などを受けて穴だらけになるという意味合いを持つ言葉である。まるで二隻の船どうしの間での小競り合いが撃ち合いに発展し，それによって一方が大破したかのような印象が，ここでは与えられている。

更に，事故後に重傷を負った人々が担ぎ込まれたボレアス号の船内では，野戦病院を彷彿とさせる光景が広がっている。そのなかでも特に，瀕死の重傷を負いながら勇敢に耐えぬく14歳の海軍士官学校生の描写は注目に値する。

> A little wee French midshipman of fourteen lay fearfully injured, but never uttered a sound till a physician of Memphis was about to dress his hurts. Then he said:
>
> “Can I get well? You need not be afraid to tell me.”
>
> “No—I—I am afraid you can not.”
>
> “Then do not waste your time with me—help those that can get well.”
>
> “But —”
>
> “Help those that can get well! It is not for me to be a girl. I carry the blood of eleven generations of soldiers in my vein!” （51）

ブランチの調査によれば，この作中人物にも実在するモデルがおり[11]，『ミシシッピ川の生活』の「大惨事」の章にも彼の姿がわずかに書き込まれている ── “A young French naval cadet, of fifteen, son of a French admiral, was fearfully scalded, but bore his tortures manfully.”（241）。しか

11）この犠牲者は Emanuel de Generes-Sourville という名の若者で，事故当時の年齢は18歳だった（Branch 16–17）。

し『金ぴか時代』ではより詳細に書き込まれ，自分の命はもう助からないから，どうか助けられる者のところに行ってくださいと医師に訴える，若いながらにヒロイックで軍人らしい姿が前面に出されている。

第４章に見られるこうした戦争を想起させる表現・場面・人物は，以降の『金ぴか時代』の物語展開，とりわけ孤児ローラ・ホーキンズを主軸とするストーリーと関連付けてみると，少なからぬ重要性を持ってくる。ローラの物語の隠れた主題は〈父探し〉なのだが，それは戦争と奇妙な形で結びついている。ローラの本当の父は，この蒸気船の爆発事故によって行方知れずになり，作品の最後まで姿を現さない。しかし小説の書き手たちは「あとがき」でも，ローラの父親が結局見つからなかったことについてわざわざ釈明をするなど（576），不在でありながら（あるいは不在であるからこそ）この人物は奇妙な印象を読み手に残す。彼は精神的なトラウマを負い，記憶も損なわれているのではないかという推測が作中ではなされている。そして，片足が悪くびっこをひいているという身体上の手掛かりもあるのだが，それは蒸気船の爆発で負った傷によるものだという印象を読み手はまず与えられる。

ところが『金ぴか時代』終盤の裁判場面に至って，小説の話題が例の蒸気船の事故にようやく立ち戻ると，ローラの父が負った傷は，蒸気船の爆発によるものなのか，南北戦争によるものなのか，不明瞭になってしまう。裁判でセラーズ大佐がふるう長広舌の一部を以下に引用しよう。

> “You see how she［Laura］was situated, gentlemen; poor child, it might have broken her heart to let her mind get to running on such a thing as that. You see, from what we could make out her father was lame in the left leg and had a deep scar on his left forehead. And so ever since the day she found out she *had* another father, she never could run across a lame stranger without being taken all over with a shiver, and almost fainting where she stood. And the next minute she would go right after that man.［…］Time and time again, gentlemen of the jury, has this poor suffering orphan flung herself on her knees with all her heart’s gratitude in her eyes before some scarred and crippled veteran, but always, always to be disappointed, always to be plunged into new despair—if his legs were right his scar was wrong, if his scar was right his legs were wrong. Never could find a man that would fill the bill. Gentlemen of the jury, if you have hearts, you have feelings, you have warm human sympathies, you can feel for this poor suffering child. Gentlemen of the jury, if I had time, if I had the opportunity, if I might be permitted to go on and tell you the thousands and thousands and thousands of mutilated strangers this poor girl has started out of cover, and hunted from city to city, from state to state, from continent to continent, till she has run them down and found they wan’t the ones, I know your hearts—”（506–08　下線は引用者による）

父親を必死で探し求める可哀そうなローラは，何度も何度も繰り返して父と思しき男たちに駆け寄っていった。だが決まってそれは人違いで，戦争で負傷して障害を負ったどこかの退役軍人（veteran）であることが分かるのだった──そのようにセラーズは言う。妄想癖のあるセラーズの言葉をそのまま真に受けることはできないにしても，ローラの父と戦争で負傷した元兵士たちの姿がここで重ねられていることは示唆的である。

更に興味深いのは，ローラの父と彼女のかつての恋人との類似である。かつて妻子持ちであることを隠してローラと交際し，踏みにじって姿を消したルイジアナ出身のセルビー大佐は，その後南北戦争で足を負傷してしまう。そのうえ経済的な苦境にも陥った彼は，今や首都ワシントンでロビイストとして活躍し社交界の花にもなっているローラの前に，杖を持ちびっこをひいて再び姿を現す（第38章）。〈びっこ〉という共通項が，ローラの父とこの南部人を繋ぎ，二人はある程度重なり合う印象がある。

謎めいたローラの父と零落したセルビー大佐。この二人の人物の存在は，南西部（ワシントン・ホーキンズが二束三文で購入した〈テネシーの土地〉）と東部（首都ワシントン，ニューヨークなど）を多数の登場人物が往還し，その地理的対立軸で読まれがちな『金ぴか時代』という作品に，戦争によって荒廃した深南部への眼差しを導入している。それは同時に，発展著しい戦後のアメリカ社会へのオプティミズムを基調としたこの小説に，不安な影をうっすらと投げかけるものでもある。最後まで姿を現さず，精神に異常をきたしているとも考えられる正体不明のローラの父は，セルビー大佐と重なり合うことで，戦争のトラウマに苦しみ，アメリカ社会の復興の恩恵にあずかれずあてどなく彷徨う人々を象徴する。そのような読み方ができる『金ぴか時代』のその後の展開を視野に入れても，第４章での蒸気船爆発の背後に南北戦争を読み込むことが可能である。

6．結語

本稿では小説『金ぴか時代』の第４章を，マーク・トウェインがミシシッピ川を舞台として取り上げた初めてのフィクション作品として位置付け，1857年に起きた蒸気船爆発という事実の処理の仕方，後続のトウェイン作品，とりわけ『ミシシッピ川の生活』第20章との関連，そして『金ぴか時代』という作品内での章の役割などを手掛かりにすることにより，このエピソードの重要性を探ることを試みた。サミュエル・クレメンズにとって，ミシシッピ川でのパイロット見習いとしての体験は，弟ヘンリーを失った蒸気船爆発の悲劇と分かち難く結びついている。その結びつきを如実に示した物語を書くことで，彼は小説家マーク・トウェインとしての実質的な一歩を踏み出した。その後には，『トム・ソーヤーの冒険』『ミシシッピ川の生活』『ハックルベリー・フィンの冒険』といった盛期の代表作，更には *Pudd'nhead Wilson*（1894年）や未発表の *Which Was It?*（1899–1906年執筆）といった，人生の苦みに満ちた晩年の小説が書かれて

いくことになる。これらの作品群は，ミシシッピ川を何らかの形でその背景としながら，主要登場人物が抱えた様々な罪の意識に光を当てる点で共通性を持つが，そのような作品系列の重要な起点として『金ぴか時代』第 4 章を捉えることができる。

本稿では，『金ぴか時代』で扱われている蒸気船爆発のエピソードが，クレメンズがパイロットの仕事を辞する原因となった南北戦争の表象である可能性も探った。ミシシッピ川での弟の事故死という私的な悲劇と，南北戦争という国家的なレベルでの悲劇は，客観的な事実のレベルでは互いに関係がない。しかし，どちらも多くの犠牲者を出した悲劇であること，時期的にかなり隣接していること，そしてサム・クレメンズにとってそれぞれの出来事に関して後ろめたい気持ちを抱える私的事情があったことなどを考え合わせると，書き手のなかでは双方は一体のものとして捉えられていた，という見方に私は傾く[12)]。

クレメンズの南北戦争への関与については，より詳細に検討する余地がある。同時に，トウェイン作品群の重要な一部として，『金ぴか時代』という作品を更に深く検討する作業も残されている。合作であるため分析対象として顧みられることの少ないこの長編だが，父ジョン・マーシャル・クレメンズや兄オーリオンといった親族が主要登場人物のモデルとなり，父＝ワシントン・ホーキンズが購入した〈テネシーの土地〉の行方が小説の多岐にわたるプロットの収斂点となるこの小説ほど，クレメンズ自身の一族を正面から取り上げた作品は他にない。そしてこの作品の第 4 章に関する限り，共に執筆作業を行なったウォーナーの影響は明らかに度外視できる。ミシシッピ川とそこで起こった出来事について知り尽くしたサム・クレメンズでなければ書きえなかったこの特異な一章に焦点を当てることによって，自らの過去に向き合い，それを文学作品へと昇華していこうとする小説家マーク・トウェインの試みの核心を知ることができる。

＊本稿は，科研補助金基盤研究（C）「罪悪感の文学――マーク・トウェイン小説作品の自伝的基盤を探る」（課題番号 16K02490）の成果の一部である。本稿作成の最終段階において，日本ウィリアム・フォークナー協会全国大会（2019 年 9 月 14 日，於　駒澤大学）のシンポジウム「アメリカ文学とミシシッピ川」で口頭報告を行ない，そこでの質疑応答を基に若干の加筆や修正を施したことを付記しておく。

引用・参照文献

Aaron, Daniel. *The Unwritten War: American Writers and the Civil War.* 1973. U of Wisconsin P,

12）『ミシシッピ川の生活』第 20 章「大惨事」についても同様のことが言える。先述のようにこの著作の第 18～21 章は，それに先立つ「昔日のミシシッピ川」のテクストと戦後南部再訪の旅の記録とを橋渡しするために書かれたものだが，ペンシルベニア号の大惨事以降の自らの川での実体験についてはまったく語らず，パイロットを辞めた後のキャリアを辿る第 21 章 “A Section in My Biography” でも，南北戦争にある程度関わったことについて触れることをしない。ここには，ペンシルベニア号の惨事と，サム・クレメンズのミシシッピ川でのキャリアを終わらせた南北戦争とを一つのものとして捉える発想が感じ取れる。

1987.

Branch, Edgar Marquess. *Men Call Me Lucky: Mark Twain and the* Pennsylvania. Friends of the Library Society: Miami U, 1985.

French, Bryant M. *Mark Twain and* The Gilded Age. Southern Methodist UP, 1965.

Kruse, Horst H. *Mark Twain and* Life on the Mississippi. U of Massachusetts P, 1981.

Powers, Ron. *Dangerous Water: A Biography of the Boy who Became Mark Twain.* Basic Books, 1999.

Scharnhorst, Gary. *The Life of Mark Twain: The Early Years, 1835–1871.* U of Missouri P, 2018.

Twain, Mark. *The Adventures of Tom Sawyer.* 1876. Edited by Shelly Fisher Fishkin, The Oxford Mark Twain, Oxford UP, 1996.

———. *Autobiography of Mark Twain, Volume1*. Edited by Harriet Elinor Smith et al., U of California P, 2010.

———. *Life on the Mississippi*.1883. Edited by Shelly Fisher Fishkin, The Oxford Mark Twain, Oxford UP, 1996.

———. *Mark Twain's Civil War.* Edited by David Rachels, UP of Kentucky, 2007.

———. *Mark Twain's Letters, Volume1: 1853–1866.* Edited by Edgar Marquess Branch et al., U of California P, 1988.

Twain, Mark, and Charles Dudley Warner. *The Gilded Age*.1873. Edited by Shelly Fisher Fishkin, The Oxford Mark Twain, Oxford UP, 1996.

Wecter, Dixon. *Sam Clemens of Hannibal*. Houghton Mifflin, 1952.

井川眞砂 「『コネティカット・ヤンキー』とトウェインの「革命願望」」『アメリカ文学と革命』アメ労編集委員会編，英宝社，2016年，225–62頁。

後藤和彦 『迷走の果てのトム・ソーヤー――小説家マーク・トウェインの軌跡』松柏社，2000年。

里内克巳 「改訂される事実とフィクション――マーク・トウェインの未発表小説『それはどっちだったか』の来歴を探る」『言語文化研究』43号，2017年，77–96頁。

竹内康浩 『謎解き『ハックルベリー・フィンの冒険』――ある未解決殺人事件の深層』新潮社，2015年。

永原 誠 『マーク・トウェインを読む』山口書店，1992年。